





團十郎切腹事件

昭和三十五年二月二十日 初版印刷

昭和三十五年二月二十五日 初版発行

定 価 二百五十円

著 者 戸板康二

発行者 河出孝雄・東京都千代田区神田小川町三ノ八

印刷者 守安 巖・東京都千代田区神田三崎町一ノ一

発行所 河出書房新社・東京都千代田区神田小川町三ノ八

目次

盲女殺人事件

三頁

ノヲ失踪事件

六三頁

團十郎切腹事件

九五頁

六ス夕殺人事件

一五五頁

装
幀
神
保
朋
世

盲女殺人事件



漱石の『彼岸過迄』の中に「雨の日に紹介状を持って逢いに来る男が厭になつた」という言葉がある。シンクスというのが、これであろう。私にとつても同じような話がある。七月の舞踊会というのは、全く私にとっては、何かしら災難を持ちこんでくるのである。

一昨年（一九三〇年）の七月、「かさね」を新しく演出する試演会があつて、私も発起人の連名に加わつた。歌舞伎の若手で、頭のいい俳優の催しだから、一般の舞踊界とは縁遠い私が顔を出してもおかしくないと思つたのだ。しかし、その会の終つた晩から、私はチフスで三カ月も床についてしまった。

去年の七月には、私の従妹の娘が、土用ざらいをするといふので、招かれて行

って、帰りに転んで右の脇をくじいた。もっともこれは、少々酔っていた私自身の不注意だが、二年続いてろくなことがない。

ところで、今年は、また七月の末に、坊城笑子の個人舞踊会がきまった。出し物は「朝顔」で、三幕のおどりであるが、歌舞伎の「朝顔日記」（原作でいうと「生写朝顔話」）をほとんど踏襲した台本であった。

第一幕が深窓に育った美女の、心の成長を、バレエ風なタッチで演出するといふのである。次の幕は、女主人公の恋物語を、能の葛物の感覚で描くといふのである。最後の幕は、男にすてられ、泣いて目をつぶした哀れな彼女が大井川のほとりで、奇蹟的に視力を回復するという伝説的なストーリーを、文楽の人形を参考にして、歌舞伎の人形ぶりよりもっと人形らしく演じるというのである。

つまり、どの幕もちがうニュアンスのおどりなので、そこに坊城笑子と、台本をこしらえた彼女の夫の坊城秀のねらいがあるらしかった。

五月のはじめに、坊城夫妻が社へたずねて来て、このプランを語った時、私は全幕を同じムードで押すことをすすめた。しかし笑子も秀も、承知しない。

いつもは例えば最初に「瀨死の白鳥」をおどり、中幕に「道成寺」をおどり、最後に「淀君の恋」をおどったりすることがある。今度もそういうバラエティを一人の人物で貫くというちがあるだけだ、と主張するのである。

私は秀という人物はよく知らないが、笑子のほうは、彼女が十七歳で、神田の文明女子学院を出て、松蔭流に入門した時から知っている。どこかの雑誌で大変その素質をほめたのが縁で、時々家へも訪ねてくるようになった。坊城秀と恋愛して、一しょになる時には、仲人たごとを頼まれたが、それは断わった。しかし式にも出てやった。何かと相談にも乗るようになってきた。要するに舞踊界の中では、一番親しい関係だったのである。

最近の笑子は、実はスランプだった。舞踊界というところは、戦国時代のように、神経のいらいら尖ってくる世界である。才能がゆたかで、いい助言者を持つ

た少数の舞踊家は、自分のペースを静かに守りながら、徐々にその芸を完成してゆける。しかし、それより一段低いランクにひしめいている数人あるいは数十人は、個人的な発表会の企画に、世間をおどろかすような、いわゆる話題作を持ち出し、そういう視角からの評判をかき立てなければならぬ。

私は舞踊の会は、いちいち行つてはいない。鬼面人を脅すような題材だの、ふしぎなスタッフの組み合わせだのに好奇心をそそられ、行つてみると、芸術的にはまことに低劣な公演だったりする例が、あまりに多すぎるからだ。

しかし坊城笑子だけは、もうこの七八年の個人発表会を毎年見てきた。去年の四月におどつた「出雲のお国」がよくなかつたので、私は呼んで、苦言を呈した。秋の芸術祭に、他の舞踊会と合同で「四季の遊び」の一つを受け持った彼女にも、往年の精彩が全くなかつた。

「どうしたんだい？ 笑ちゃん」といったら、今にも泣き出しそうになつた。まづげの長い彼女の目は、二十代の頃の輝きを失つていた。

そんなあとの「朝顔」なので、私は慎重に、地味にこしらえたほうがいいという説であったのだが、結局夫妻の案に同調した。ただ、役の名前は、淨るり「生写朝顔話」の場合、秋月の娘深雪が、のちに瞽女こぜになってから朝顔を名のるのだが、全部朝顔に統一したらいいだろうとすすめた。折よく五月のおわりに、文楽が上京して「朝顔話」が出たので、私も坊城夫妻と一しょに見たりもした。

その時、廊下で煙草を吸っていたら、老優の中村雅楽がらくが来ていた。そばへ行つて挨拶すると、「私は昔、この朝顔の通しをやったことがあるんだよ」といった。最近芝居では出ない「浜松小屋の段」の話などが出て、例によって記憶のいい老人の持ち合わせている話材は、尽きるところを知らなかった。

せっかく原作を読んで自由に脚色するのならば、歌舞伎めいた箇所には、少し変った型が入ってもいいと思ったので、私は笑子を、雅楽のところへつれて行ったりした。

雅楽の家のかえりに、二人でしばらく歩いた。

「ねえ先生、私、こうしている時が一番心が静かなのよ」笑子が低い声でいった。
坊城笑子は疲れている。私はそう思った。

ここで、朝顔の哀れな物語を説明しておかなければなるまい。深窓の姫君として育った彼女は、宇治の螢狩に行った時に、一人の男を知った。宮城阿曾次郎みやぎあそじろうという学者肌の青年である。風が吹いて彼女の髪につけていた飾りが飛んで、男の舟に入った。男が返しに來たのを引きとめ、自分の舟に招いて、琴を弾いてきかせた。母がすすめたのだったが、男が自分の舟にきた時、顔を見て、彼女ははつとした。それまでよく夢に見ていた、空想の恋人に生き写しだったからである。

男は行儀正しく挨拶して去ろうとしたが、彼女が懇願して、持っていた扇に一筆したためてもらった。阿曾次郎は、「露のひぬ間の朝顔を、照らす日影のつれなきに、哀れひとむらさめのさらさらとふれかし」と、見事な筆蹟を残して去る。

この扇は、その後、彼女が肌身離さずに持ち歩いて、涙で汚れた。

間もなく縁談が起った。駒沢次郎左衛門という立派な武士だという話だったが、彼女は阿曾次郎以外の男の妻になることを、考えるだけの心のゆとりを持たなかつた。父母よりも、彼女のそういう切実な思いを知っていたのは、乳母の浅香であつたが、浅香さえも知らぬうちに、姫は館をぬけ出し、失踪してしまつた。

浅香は姫のあとを追つて浜松までくると、男を慕い泣いて目をつぶしてしまつた瞽女がいる。奇遇におどろいたが、浅香はやがて悪者に殺害される。

大井川に面した島田の町で、彼女は朝顔と名のつて琴や三味線を弾き、合力を乞うあわれな身の上になつていた。宿屋に招かれて行つて庭先で琴をひく。客はほとんど声を聞かせず、大枚の金子きんすと目薬をおいて立ち去つた。様子を聞くと、その客こそ、永いあいだ尋ねていた阿曾次郎らしい。

半ば狂乱の姿であとを追つて、大井川のところまでゆくと、男は舟で向う岸に渡つたあと、折からの出水で川どめとなつてしまふ。朝顔が悲嘆にくれていると

ころへ、宿屋の主人が来てなだめる。そして目薬をのませると、ふしぎにも、朝顔は目が見えるようになる。

この物語は、シナの伝奇にも似ているし、大井川のほとりで女主人公が髪をふり乱して悲しむあたりは、「道成寺」伝説の日高川のくだりを連想もさせる。

最近歌舞伎では、開眼した朝顔がもとの美しい姿にもどり、恋しい男ともめぐりあって、二人で国へ帰る道行みちゆきを見せる台本ができているが、大体このストーリーは、宮城阿曾次郎が名前をかえて駒沢次郎左衛門になっていることを、登場人物にも観客にも伏せた上で進行するところに、かなり無理がある。

朝顔（ふつうの役名は深雪）は、つまり縁談を拒み通したが、もし承知してさえたならば、恋人と結ばれたわけなのだ。そのくいちがいが、悲劇になっているのだが、浄るりの中から女のはげしい恋心というものを引き出してきて、それを舞踊という形に具象化するためには、よほど自由な脚色が必要であった。

六月のはじめに坊城秀が社に届けてきた台本を見て、私はある程度満足した。これならば、去年のような失敗作とはならずにはむだろうと思った。

ちょっとおもしろいのは、三幕目の大井川のとおりで、義太夫を使って、人形に近い動きで朝顔の狂乱を見せるところだ。そこへ宿屋の主人が、大枚の金子と目薬をもってかけつけてきて、泣いている朝顔を説得し、目薬をのませる。目薬といっても古風な粉薬になっていて、それをのむと、奇蹟を象徴する薄どろの太鼓が鳴り、朝顔が失神する。ここで幻覚になり、川の面の向うの紗の幕のかげに、若き日の彼女の華やかな恋の回想があらわれる。むろんこれは別の、笑子より若い弟子の那谷という子がおどる。

この間に、笑子の目に生気が宿り、もう一度起き上がる。また人形の動きになり、「ああらふしぎや朝顔の、両眼涼しく見開きて」云々の文句で、朝顔の前に、喪失していた視覚が戻ってくる。

この薬をのんだ直後の幻覚が、人形風の動きと全く異った手法のおどりになっ

ているのに、そのあとまた続く人形風の動きとの関係が、台本を読んでも、ちつとも不自然でないのに私は感心した。

ただ人形ぶりにするから、人形つかいがいないとおかしいだろうと私はいった。「じゃア操り三番のように、マリオネットで行きましようか」と秀がいう。

「人形つかいで黒衣くろいを着て動くというような、しんきくさい役をいやがる子ばかりだろうね」

「そんなことはないでしょう。前の幕で目だつ役に出る子に、うめ合わせに黒衣を着てもらいますよ」秀は白い歯を見せて笑った。

結局、歌舞伎の、例えば「やぐら」のお七、「矢口」のお舟のように、人形つかいが使う人形という形で、最後の場面の朝顔を動かすことにきまった。

私はそれから、二三度けい古場ものぞいたし、パンフレットに自分も書くほかに、作家や画家にも推薦の言葉を書いてもらうように、斡旋も惜しまなかった。

かねてから坊城笑子をひいきにしてくれる鎌倉の老作家が、「笑子さんには、